

テヘラン日本人学校における英語活動の指導と実践

前在イラン日本国大使館附属日本人学校 教諭

千葉県千葉市立有吉小学校 教諭 大原 淳

キーワード：在外教育施設、少人数、コミュニケーション力、English Café、モジュール

1. はじめに

在イラン日本国大使館附属日本人学校は、イラン・イスラム共和国の首都であるテヘランに配置された、在外教育施設である。2015年度は子どもの数が12名、教員の数が6名の世界的に見てもとても小さな学校である。保護者はみな教育熱心で、他の日本人学校同様、英語教育に期待するものは大きい。その中で、私が試行錯誤を重ねて行ってきた英語活動の指導と実践について報告する。

2. テヘラン日本人学校の特徴

(1) 英語活動を行う上でのメリット

テヘラン日本人学校の、子どもの数は非常に少ない。そのため、語学学習の基本である少人数指導がしやすい。また、保護者だけでなく、子どもの英語に対するモチベーションも高く、どの子も英検を目指して日々英語学習に取り組んでいる。

(2) 英語活動を行う上でのデメリット

イランの公用語は、ペルシャ語である。そのため、子どもたちの中には「英語を勉強しても、イランではあまり使えない」という考えをもった子がいる。また、少人数がゆえに、子どもたち同士でコミュニケーションをとるアクティビティーに限界があったり、普段から多くの子どもと接していないせいも、そもそも友達とコミュニケーションをとることに対して消極的な子どもが多かったりする。

(3) その他の英語を学習する授業

テヘラン日本人学校では、英語学習に対する取り組みが充実している。まずは、週1コマ（2時間）の図工のイメージ教育である。英語の堪能なイラン人講師に、図工を英語で教えてもらうものだ。次に、週1日のイングリッシュデイ。この日は、朝の会から帰りの会まで、主に英語を使って1日を生活する。子どもから教師はもちろんのこと、子ども同士もできる限り英語で会話をするのだ。また、不定期ではあるが、英語の必要感を持たせるために、近くのパキスタンスクールとも交流することで、子どもたちの英語力を高めてきた。

3. テヘラン日本人学校の英語活動

(1) 概要

テヘラン日本人学校での英語活動をより充実させるために、私が考えたものとして、English café（イングリッシュカフェ）がある。名前の由来としては、子どもたちが気楽にカフェに入って友達とぺちゃくちゃおしゃべりするような感覚で、英語を話してほしいという願いのもと、この名前がつけられた。平成32年度から実施される新学習指導要領では、小学校での英語活動の時間数を、これまでの週1時間から週2時間（モジュールあり）に増やすようになっている。また、実施学年もこれまでの5年生から3年生に引き下げられる。そこで、テヘラン日本人学校では、それを先行実施することにした。



パキスタンスクールとの文化交流会

(2) 時間

語学学習にとっての1番の近道は、毎日コツコツと学習することである。そこで、子どもたちが毎日少しでも英語にふれられるように、以下の表のように実施した。(※イランでは、日曜日が週の始めである)

日	月	火	水	木
英語活動 (1時間)	English Café (朝学習の15分間)	English Café (朝学習の15分間)	English Café (朝学習の15分間)	English Day イマージョン教育 (図工)

このように、週1時間の英語活動の時間とEnglish Caféの朝学習(15分間×3日間)で週2時間分の英語活動の時間を確保した。

(3) 内容

① 2年目(2014年度)

2014年度は、English caféを始めたばかりであったため、試行錯誤の中進めていった。まず、授業形態としては朝学習の時間に、子どもたちは3グループに分かれたクラスに自由に移動していける形をとった。なぜなら、子どもの英語に対する自主的な態度を重視したかったためだ。3グループの教師は、それぞれ特色を生かして指導した。例えば、あるグループはスポーツをして体を動かしながら英語を学んだり、あるグループは日常生活でよくあるトラブルを英語で解決するような活動をしっていた。



English caféの様子

② 3年目(2015年度)

2015年度は、2014年度の反省を生かして取り組んだ。まず、English caféを「英語活動の時間の一部」として扱うようにした。つまり、授業形態は英語活動で全学年共通の題材で行っていれば、全学年が1クラスに集まって行ったり、英語活動でレベル別に授業を進めているのであれば、レベル別に分けて行ったりした。題材は、15分間という短い時間のため、主に英語活動で学習したことの復習をメインに行った。例えば、単語カルタ、歌、ゲーム、RPGの練習、短い文のリピートなどである。

4. 成果と課題

(1) 成果

子どもたちの英語力は、English caféを始める前と後とでは、明らかに伸びが見えた。英語検定をはじめとする諸検定では、多くの合格者を出した。また、英語に対する態度にも変化が見えた。普段の英語活動だけでなく、インターナショナルスクールとの交流でも、それまでのコミュニケーションをすることに消極的であった子どもたちとはうって変わって、積極的に話しかける姿が見て取れた。また、子どもたちの使う文法もより自然なものになったり、単語も多くなったりした。

(2) 課題

2014年度の反省としては、まず教師の授業準備のしにくさが挙げられた。毎回違う子どもたちがクラスを出入りするため、時には一人も子どもが来ないクラスもあった。数時間連続して指導したい内容があった場合、この授業形態では難しかった。また、レベル別ではないため、中には授業内容についていけない子どもがいたり、教師が準備した教材のレベルをその場で下げたりしなければいけない場面があった。

2015年度の反省としては、年間指導計画の作成が挙げられた。来る子どもたちの人数が固定され、指導内容も英語学習とリンクされたものになったが、肝心の年間指導計画がなかったために、行き当たりばったりの指導になってしまった。そのため、教材開発も非常に手間がかかってしまった。

以上が、2年間の主な反省である。これをそのまま日本のカリキュラム、そして日本の子どもたちに合わせることは、非常に難しい。そのため、日本の子どもたちの実態をよく捉えたり、国語や算数の基礎基本を徹底する時間とのバランスを考えたりしながら、取り入れていくことが、今後の課題となるであろう。